

2サムエル記22-24章 「ダビデの偉業」

1A 救出の歌 22

1B 敵からの救い 1-20

1C わが救い主 1-4

2C 主のしてくださった事 5-20

2B 主の前の潔さ 21-30

3B 圧倒的な勝利者 31-51

1C 征服において 31-43

2C 統治において 44-51

2A 最後の言葉 23

1B 神と共にある家 1-7

2B 勇士の業績 8-39

1C 三勇士 8-23

2C 三十人 24-39

3A 神殿への備え 24

1B 民の人口調査 1-9

2B 主ご自身の災い 10-18

3B 償いのための敷地 19-25

本文

私たちはついに、サムエル記の終わりに来ました。22章から24章までを読みます。この箇所
に題名を付けるならば、「ダビデの偉業」となるでしょう。彼が後世の民に残した霊的遺産を読むこ
とができます。

1A 救出の歌 22

1B 敵からの救い 1-20

1C わが救い主 1-4

22:1 主が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこ
の歌のことばを主に歌った。

ダビデの生涯を特徴づけるものは一言何かと云えば、「敵からの救い」であります。周囲の敵か
らの救いや自分の子アブシャロムからの救いもありましたが、最も大きな出来事は、自分自身の
主君サウルの手から救われたことです。そこでダビデは、かつて若い時に書きしるした自分の詩
を晩年に再び書き残しました。詩篇18篇に同じ詩があります。

22:2 彼はこう歌った。「主はわが巖、わがとりで、わが救い主、22:3 わが身を避けるわが岩なる神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。私を暴虐から救う私の救い主、私の逃げ場。22:4 ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は、敵から救われる。

主ご自身が自分を救われたことを、「巖」や「岩」に例えています。イスラエルに行けば、その地は岩がたくさんあり、要害と言えば、岩穴に隠れ住むことを意味していました。そして、「救いの角」とも例えています。角は、雄牛や雄羊が持つ力と権威を表しています。主が力をもって自分を救ってくださったことをほめたたえているのです。

そして、「わが」という言葉を繰り返して、救いの神を自分のものとして呼んでいることに注目してください。ダビデは、神について知っただけでなく、神を知っていました。神の救いについて、見たり聞いたりしただけでなく、神の救いを経験しました。それゆえ、神が抽象的な存在ではなく、私の救い主として個人的な存在として歌うことができました。

2C 主のしてくださった事 5-20

22:5 死の波は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。22:6 よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。22:7 私は苦しみの中に主を呼び求め、わが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、私の叫びは、御耳に届いた。

ダビデは、サウルに命を狙われていることを悟った時に、ヨナタンに「私と死の間には、ただ一步の隔たりしかありません。(1サムエル 20:3)」と言いました。彼は死ぬかもしれないという経験を何度となくしました。それを「死の波」「滅びの川」と形容しています。そして「陰府」は、死んだ後に行くところです。

そしてダビデは、そのような「苦しみの中に」主を呼び求めました。本当の主との出会いは、ステンドグラスの教会堂の中にはないかもしれません。自分の生活のど真ん中で、まさに苦しみの渦中にあります。

22:8 すると、地はゆるぎ、動いた。また、天の基も震え、揺れた。主がお怒りになったのだ。22:9 煙は鼻から立ち上り、その口から出る火はむさぼり食い、炭火は主から燃え上がった。22:10 主は、天を押し曲げて降りて来られた。暗やみをその足の下にして。22:11 主は、ケルブに乗って飛び、風の翼の上に現われた。22:12 主は、やみを回りに置かれた。仮庵は水の集まりと、濃い雲。22:13 御前の輝きから、炭火が燃え上がった。22:14 主は、天から雷鳴を響かせ、いと高き方は御声を発せられた。22:15 主は、矢を放って彼らを散らし、いはずまで彼らをかき乱された。22:16 こうして、海の底が現われ、地の基があらわにされた。主のとがめにより、その鼻の荒いぶきによって。

出エジプト記において、シナイ山に降りて来られた主、また紅海を分けられた主と同じ働きを、ダビデは自分の呼びかけに対して見ることができました。どのような形で、実際のサウルからの救い、また他の敵からの救いでそれを経験したのかは分かりません。けれども大切なのは、二つあります。一つは、これだけ主はダビデの味方をしておられた、ということです。神はキリストにあって、私たちの味方になっておられます。それは、私たちに対して害を与える者がいるならば、それをことごとく打ち滅ぼす程の感情を持っておられる、ということです。もう一つは、聖徒の祈りを聞いてくださる、ということです。神は、それだけ私たちが御名を呼び求めることを待っておられます。

22:17 主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大水から引き上げられた。22:18 主は、私の強い敵と、私を憎む者とから私を救い出された。彼らは私より強かったから。22:19 彼らは私のわざわいの日に私に立ち向かった。だが、主は私のささえであった。22:20 主は、私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。

救いが完全に主に拠るものであったことが、主語がずっと「主」になっていることから分かります。全く自分自身の内には救う力がないのに、救い出されたのです。また、敵が自分よりも強かったと言っています。使徒パウロも、ダビデと同じような死に直面する経験をしましたが、このように証しています。「ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。(2コリント 1:10)」

2B 主の前の潔さ 21-30

22:21 主は、私の義にしたがって私に報い、私の手のきよさに従って私に償いをされた。22:22 私は主の道を守り、私の神に対して悪を行なわなかった。22:23 主のすべてのさばきは私の前にあり、そのおきてから私は遠ざからなかった。22:24 私は主の前に全く、私の罪から身を守る。22:25 主は、私の義にしたがって、また、御目の前の私のきよさにしたがって私に償いをされた。

ここでダビデは、自分自身の義によって神によって救われたことを話しているのではありません。そうではなく、「報い」「償い」という言葉が出てきます。ダビデは決して完全ではありませんでしたが、しかし主の前における良心をきよく保つことにおいては、最後まで全うしました。たとえ罪を犯しても、それを告白しないということはありませんでした。彼は良心の咎めがある時には、そのまま主の前に出ていきました。

そして、迫害を受けている時は決してやり返しませんでした。シムイから呪いの言葉を受けていた時に、こう言っています。「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。(2サムエル 16:12)」私たちはたとえ、今、謂れなき非難を受けていたとしても、不当な仕打ちを受けていたとしても、もし私たちの心が主に対して正しければ、必ず主は報いを与えてくださいます。

22:26 あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、22:27 きよい者には、きよく、曲がった者には、ねじ曲げる方。

これは、今朝の礼拝で学んだ、「神の交わり」に関する部分です。神の恵みを知った者は、自分が恵み深くならなければ、その恵みを深く知ることはできません。他の人を赦さなければ、神の赦しを知ることはありません。主の聖さを知るには、聖さの中に生きなければならないのです。そうすることによって、初めて神との交わりができます。

22:28 あなたは、悩む民を救われますが、高ぶる者に目を向けて、これを低くされます。

これは聖書全体に貫かれている、神の原則です。悩む者、卑しい者、へりくだった者を引き上げてくださいます。そして高ぶる者を低くされます。

22:29 主よ。あなたは私のともしび。主は、私のやみを照らされます。

自分の闇、罪や悪い行ないを主は照らしてくださり、それで悔い改める、光の中を歩むことができるようにしてくださいます。

22:30 あなたによって私は軍勢に襲いかかり、私の神によって私は城壁を飛び越えます。

敵からの救いは、今度は、敵への戦いへと発展します。

3B 圧倒的な勝利者 31-51

1C 征服において 31-43

22:31 神、その道は完全。主のみことばは純粹。主はすべて彼に身を避ける者の盾。22:32 まことに、主のほかにだれが神であろうか。私たちの神のほかにだれが岩であろうか。22:33 この神こそ、私の力強いとりで。私の道を完全に探し出される。

ダビデは再び、主ご自身をほめたたえています。これから戦いにおける主の力を語っていきますが、その前に神の道がいかに完全であり、自分の道を定めてくださっているのかを話しています。ダビデは有能な戦士でしたが、その前に主との関係が確立していたのです。

22:34 彼は私の足を雌鹿のようにし、私を高い所に立たせてくださる。22:35 戦いのために私の手を鍛え、私の腕を青銅の弓でも引けるようにされる。

この言葉の言い回しはハバクク書にも出てきますが、雌鹿は、なんでこんな崖を跳ねるようにして登っていくことができるのか、なぜそんな高い所に立つことができるのか、と驚いてしまいます。

同じように、主がともにいてくだされば、自分では考えられないようなところをどんどん進む自分を発見することができます。

22:36 こうしてあなたは、御救いの盾を私に下さいました。あなたの謙遜は、私を大きくされます。

22:37 あなたは私を大またで歩かせます。私のくるぶしはよろけませんでした。

主の謙遜、あるいは主の温和さであります。主は私たちに対して、へりくだってくださいます。ゆえに、私たちをキリストにあって引き上げてくださいます、大きな者としてくださいます。

22:38 私は、敵を追って、これを根絶やしにし、絶ち滅ぼすまでは、引き返しませんでした。22:39 私が彼らを絶ち滅ぼし、打ち砕いたため、彼らは立てず、私の足もとに倒れました。22:40 あなたは、戦いのために、私に力を帯びさせ、私に立ち向かう者を私のもとにひれ伏させました。22:41 また、敵が私に背を見せるようにされたので、私は私を憎む者を滅ぼしました。22:42 彼らが叫んでも、救う者はなかった。主に叫んでも、答えはなかった。22:43 私は、彼らを地のちりのように打ち砕き、道のどろのように、粉々に砕いて踏みつけた。

圧倒的な力で、敵を征服しています。ダビデが通ってきた道は、キリストにある私たちの道でもあります。悪魔の力からろうじて救い出されただけでなく、悪魔を自分自身の足で踏み砕くほどの力を与えてくださいます。「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。(ローマ 16:20)」

2C 統治において 44-51

22:44 あなたは、私の民の争いから、私を助け出し、私を国々のかしらとして保たれます。私の知らなかった民が私に仕えます。22:45 外国人らは、私におもねり、耳で聞くとすぐ、私の言うことを聞き入れます。22:46 外国人らはしなえて、彼らのとりでから震えて出て来ます。

最終的な救いは、ダビデが王となり、国々のかしらとなっていることでした。これは後には、ダビデの子キリストご自身を指し示しているものであり、そしてキリストにつく者も指し示しています。「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。(黙示 1:5-6)」

22:47 主は生きておられる。ほむべきかな。わが岩。あがむべきかな。わが救いの岩なる神。22:48 この神は私のために、復讐する方。諸国の民を私のもとに下らせる方。22:49 私の敵から私を携え出される方。あなたは私に立ち向かう者から私を引き上げ、暴虐の者から私を救い出されます。まとめの賛美をしています。22:50 それゆえ、主よ。私は、国々の中であなたをほめたたえ、あなたの御名を、ほめ歌います。

ダビデの詩には、数多く、国々の中での賛美があります。これをローマ書には、異邦人にも救いが及んだこととして引用されています(10 節)。

22:51 主は、王に救いを増し加え、油そそがれた者、ダビデとそのすえに、とこしえに恵みを施されます。」

これが主がダビデに約束されたことでした。サウルを主が退かれたように、ダビデを退けることはなく、その座はとこしえまで続く、というものでした。

2A 最後の言葉 23

1B 神と共にある家 1-7

23:1 これはダビデの最後のことばである。エッサイの子ダビデの告げたことば。高くあげられた者、ヤコブの神に油そそがれた者の告げたことば。イスラエルの麗しい歌。

ダビデは詩篇において、数多くの詩を残しました。その中において、この言葉が最後になります。ダビデは、これからの残る言葉として、自分の名をはっきりと書いています。エッサイの子、これは彼の素性であり、卑しいところから出たことを表す名です。けれども、神が高く彼を引き上げられました。そして、ヤコブの神の油注ぎを受けた者として語ります。

23:2 「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。

ダビデは歌をうたうときに、それは主の御霊によってうたっていることを認識していました。このことは、イエス様ご自身が確認されています。エルサレムにイエスが来られたとき、パリサイ人に聞かれました。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、『主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』と言っているのですか。(マタイ 22:43-44 下線筆者)」そして使徒ペテロも、ダビデに対する神の靈感を確認しました。「兄弟たち。イエスを捕えた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。…実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』(使徒 1:16,20 下線筆者)」

聖書に書かれている言葉が、「これは人が書いたものであるから誤りがある。」という人たちがいます。少なくとも、聖書の記述自体がそれを否定しています。神の靈感によって書かれた言葉なのです。

23:3 イスラエルの神は仰せられた。イスラエルの岩は私に語られた。『義をもって人を治める者、神を恐れて治める者は、23:4 太陽の上る朝の光、雲一つない朝の光のようだ。雨の後に、地の

若草を照らすようだ。』

ダビデは、義によって治めること、神を恐れて治めることをよく知っている人でした。そして義による統治は、朝の光、太陽が燦々と輝くその光のように私たちの魂と体を癒します。マラキ書にて、主が太陽のようであることが預言されています。「しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。(4:2)」

23:5 まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。23:6 よこしまな者はいばらのように、みな投げ捨てられる。手で取る値うちがないからだ。23:7 これに触れる者はだれでも、鉄や槍の柄でこれを集め、その場で、これらはことごとく火で焼かれてしまう。」

ダビデ家に対する恵みの契約で終わっています。また、神をないがしろにする者に対する容赦ない裁きも宣言しています。

2B 勇士の業績 8-39

1C 三勇士 8-23

23:8a ダビデの勇士たちの名は次のとおりであった。23:8b 補佐官のかしら、ハクモニの子ヤシヨブアム。彼は槍をふるって一度に八百人を刺し殺した。

これから、勇士たちの勇猛ぶりの記録を読みます。初めに三勇士、それから三十人の勇士の名が連ねられています。ダビデの救いと彼らは関連しています。ダビデがサウルから逃げ始めた時に、彼らもダビデのところにやって来ました。「また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約四百人の者が彼とともにいるようになった。(1サムエル 22:2)」三勇士の初めは、ヤシヨブアム、一度に八百人を刺し殺しました。

23:9 彼の次は、アホアハ人ドドの子エルアザル。ダビデにつく三勇士のひとりであった。彼がペリシテ人の間でそいったとき、ペリシテ人は戦うためにそこに集まった。そこで、イスラエル人は攻め上った。23:10 彼は立ち上がり、自分の手が疲れて、手が剣について離れなくなるまでペリシテ人を打ち殺した。主はその日、大勝利をもたらされ、兵士たちが彼のところに引き返して来たのは、ただ、はぎ取るためであった。

二人目はエルアザルです。「手が剣について離れなくなる」ということは、ここに物理的な戦いの

みならず、霊の戦いや信仰の戦いにおける勝利の秘訣も見つけることができます。つまり、自分がその働きから離れられなくなるまで、その働きを行なっていくということです。私が外国語を習った時は、もう本当に泣きたくなくなりましたが、それでも「脳みそに筋をつけるのだ」と彼女に叱咤されながら行いました。信仰においても、主の働きについても同じです。

そして他の兵士が来た時は、はぎ取るだけでした。多くの人が、この剥ぎ取りだけを好みます。すでに整えられた神の恵みだけを好みます。しかし、主は私たちにもっと大きな祝福、すなわち一途に主に自分を捧げていくところにある祝福を用意してくださっています。

23:11 彼の次はハラル人アゲの子シャマ。ペリシテ人が隊をなして集まったとき、そこにはレンズ豆の密生した一つの畑があり、民はペリシテ人の前から逃げたが、23:12 彼はその畑の真中に踏みとどまって、これを救い、ペリシテ人を打ち殺した。こうして、主は大勝利をもたらされた。

三人目のシャマの戦いからも、信仰的なことを学べます。それは「踏みとどまる」ことです。多くの人が、戦いをしなくなったら、すぐに撤退を始めます。反対があると「これは主の御心ではない」と勝手に決めつけます。けれども、主が与えられた持ち場に踏みとどまるのです。そうすれば、主ご自身がそこから勝利を与えてくださるのです。

23:13 三十人のうちのこの三人は、刈り入れのころ、アドラムのほら穴にいるダビデのところによって来た。ペリシテ人の一隊は、レファイムの谷に陣を敷いていた。23:14 そのとき、ダビデは要害におり、ペリシテ人の先陣はそのとき、ベツレヘムにあった。23:15 ダビデはしきりに望んで言った。「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ。」23:16 すると三人の勇士は、ペリシテ人の陣営を突き抜けて、ベツレヘムの門にある井戸から水を汲み、それを携えてダビデのところを持って来た。ダビデは、それを飲もうとはせず、それを注いで主にささげて、23:17 言った。「主よ。私がこれを飲むなど、絶対にできません。いのちをかけて行った人たちの血ではありませんか。」彼は、それを飲もうとはしなかった。三勇士は、このようなことをしたのである。

先ほど話した、ダビデがサウルから逃げて隠れていたアドラムの洞穴での出来事です。ダビデが幼少の頃からの、ベツレヘムの水を求めました。そして、なんとそれを文字通り受け止めて、三勇士は命をかけて持って来ました。

そしてダビデの行動は、彼の生涯の姿勢を表しています。それを飲もうとせず、地に注いでしまいました。せっかく三勇士が命をかけて持ってきたのに、もったいない、と思ったら、信仰について、またダビデについて何も知りません。ダビデという人間は、礼拝者であります。つまり、すべての良いものは主から来ているのであり、自分は主に明け渡されているという認識です。命がかかっている水を、安易に自分のものとするのを彼は到底できなかったのです。イエスに高価な香油を注い

でしまった女のことを、弟子たちが「貧しい人に施すことができるのに、なぜもったいないことをするのだ」と言いましたね、けれどもイエス様は、彼女のしたことが至るところで言い広められる、と言いました。

23:18 ツェルヤの子ヨアブの兄弟アビシャイ、彼は三人のかしらであった。彼は槍をふるって三百人を刺し殺し、あの三人とともに名をあげた。23:19 彼は三人の中でもっとも誉れが高かった。そこで彼らの長になった。しかし、あの三人には及ばなかった。

覚えていますね、ダビデの傍らにいてダビデに従っていたヨアブの兄弟アビシャイは、この三勇士の頭でした。

23:20 エホヤダの子ベナヤは、カブツェエルの出で、多くのでがらを立てた力ある人であった。彼は、モアブのふたりの英雄を打ち殺した。また、ある雪の日に、ほら穴の中に降りて行って雄獅子を打ち殺した。23:21 彼はまた、あの堂々としたエジプト人を打ち殺した。このエジプト人は、手に槍を持っていた。彼は杖を持ってその男のところの下って行き、エジプト人の手から槍をもぎ取って、その槍で彼を殺した。23:22 エホヤダの子ベナヤは、これらのことをして、三勇士とともに名をあげた。23:23 彼はあの三十人の中で最も誉れが高かったが、あの三人には及ばなかった。ダビデは彼を自分の護衛長にした。

ベナヤは、ソロモンの治世時には軍団長になります。

2C 三十人 24-39

23:24 あの三十人の中には次の者がいた。ヨアブの兄弟アサエル。ベツレヘムの出のドドの子エルハナン。23:25 ハロデ人シャマ。ハロデ人エリカ。23:26 ペレテ人ヘレツ。テコア人イケシュの子イラ。23:27 アナトテ人アビエゼル。フシャ人メブナイ。23:28 アホアハ人ツアルモン。ネトファ人マフライ。23:29 ネトファ人バアナの子ヘレブ。ギブアの出のベニヤミン族リバイの子イタイ。23:30 ピルアトン人ベナヤ。ガアシュの谷の出のヒダイ。23:31 アラバ人アビ・アルボン。バルフム人アズマベテ。23:32 シャアルビム人エルヤフバ。ヤシェンの子ら。ヨナタン。23:33 ハラル人シャマ。アラル人シャラルの子アヒアム。23:34 マアカ人アハスバイの子エリフェレテ。ギロ人アヒトフェルの子エリアム。23:35 カルメル人ヘツライ。アラブ人ペアライ。23:36 ツォバの出のナタンの子イグアル。ガド人バニ。23:37 アモン人ツエレク。ツェルヤの子ヨアブの道具持ちベエロテ人ナフライ。23:38 エテル人イラ。エテル人ガレブ。23:39 ヘテ人ウリヤ。全部で三十七人である。

全部で三十七人なのに三十人の勇士、となっているのは、おそらく途中で戦死した人がいてその代わりの戦士も含めているからでしょう。ここで注目したい人は二人いますが、34節でアヒトフェルの子エリアムです。アヒトフェルはダビデの議官で、ダビデを裏切りました。そしてエリアムはバテ・シェバの父です。もう一人は、バテ・シェバの夫ウリヤです。ダビデによって殺されてしまいまし

たが、彼も三十人の中にいた勇士でした。

もう一度、思い起こしましょう、これらの勇士がかつては「困窮している者、負債のある者、不満のある者たち」でした。主イエスが選ばれた時も、漁師、取税人、熱心党员など、ごくごく一般の人々、あるいは部外者でありました。次の言葉を思い出します。「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無いものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。(1コリント 1:26-29)」

3A 神殿への備え 24

これでダビデの偉業の記録が終わりますが、次の話は実は列王記の前置きの話になっています。どのようにして、ソロモンの建てる神殿の敷地が選ばれたのか、その経緯が書かれています。

1B 民の人口調査 1-9

24:1 さて、再び主の怒りが、イスラエルに向かって燃え上がった。主は「さあ、イスラエルとユダの人口を数えよ。」と言って、ダビデを動かして彼らに向かわせた。

ダビデはイスラエル人の人口を数えようとしています。ここに主が怒られている、とあり、そして、主が人口を数えよと言って、ダビデを動かした、とあります。けれども同じ出来事が書かれている歴代誌第一 21 章1節には、「サタンがイスラエルに逆らって立ち、ダビデを誘い込んで、イスラエルの人口を数えさせた。」と、サタンがダビデを誘惑したことが書かれています。このことは矛盾しません。まずダビデは自分の欲望から、人口を数えたいと思いました。サタンはダビデのその欲を利用して、数えるように仕向けたのです。けれどもサタンは、究極的には主なる神のしもべです。主が許さなければ何もすることができない存在です。そうゆうわけで、ここでは究極的には主がすべてを掌握されていることを表すために、主が数えよ、と言われたと書かれています。

同じような箇所が、民数記のバラムのところでも出てきます。モアブの王バラクのところに行ってイスラエルをのろおうとしたのですが、主が、「行きなさい」と言われました。けれども、主は怒られて、抜き身の剣をもった御使いを、彼の前に置かれたのです。私たちが自分でやろうと言いつつも、神の警告を無視して自分のやり方を貫き通そうとすると、主はそのままにされることによって、その行為の結末を刈り取らせるようにされます。

なぜ、これが悪いことだったのか？ 出エジプト記にはこう書いてあります。「あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を主に納め

なければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。(出エジプト 30:12) 人口調査をするということは、当時の社会では調査をする者の所有になることを意味します。したがって、主はこのことを戒めるために、贖い金を主に納めなければいけないと命じられました。その調査をする者の所有ではなく、主ご自身の所有であることを示すためです。ところが、ダビデがそれを行なったという形跡はありません。したがって、イスラエルの民は主の民であるのに、それをダビデのものにしようとするという悪い行ないなのです。

24:2 王は側近の軍隊の長ヨアブに言った。「さあ、ダンからベエル・シェバに至るまでのイスラエルの全部族の間を巡り、その民を登録し、私に、民の数を知らせなさい。」24:3 すると、ヨアブは王に言った。「あなたの神、主が、この民を今より百倍も増してくださいますように。王さまが、親しくこれをご覧になりますように。ところで、王さまは、なぜ、このようなことを望まれるのですか。」24:4 しかし王は、ヨアブと将校たちを説き伏せたので、ヨアブと将校たちは、王の前から去って、イスラエルの民を登録しに出かけた。

ヨアブは、間違っていると感じていることをはっきりと言いました。「この民を今より百倍も増してくださいますように」というのは、アブラハムに対する神の祝福のことを考えているのだと思います。主が祝福してくださっているのに、それを自分のものとして誇りたいと思ってしまったのです。

24:5 彼らはヨルダン川を渡って、ガドの谷の真中にある町、ヤゼルに向かって右側にあるアロエルに宿営し、24:6 それから、ギルアデとタフティム・ホデシの地に行き、さらにダン・ヤアンに行き、シドンに回った。24:7 そしてツロの要塞に行き、ヒビ人やカナン人のすべての町々に行き、それからユダのネゲブへ出て行って、ベエル・シェバに来た。24:8 こうして彼らは全土を巡り、九か月と二十日の後にエルサレムに帰って来た。24:9 そして、ヨアブは民の登録人数を王に報告した。イスラエルには剣を使う兵士が八十万、ユダの兵士は五十万人であった。

ヨアブは、時計反対周りでイスラエルを東西南北巡りました。初めに、ヨルダン川の東ガドの方に行き、それから来たに行き西にあるシドン、ツロまで行きました。それから南下してネゲブのほうにいき、ベエル・シェバに着きました。

人数が書かれていますが、第一歴代誌には「彼はレビとベニヤミンとを、その中に登録しなかった。ヨアブは王の命令を忌みきらったからである。(21:6)」とあります。ヨアブは、あえて大雑把な調査で終わせたのです。レビ人は主への奉仕をする者であり、またベニヤミンはサウル家がいるところです。これまでダビデの者にするというのはあまりにも傲慢だ、と彼は思ったのでしょう。

2B 主ご自身の災い 10-18

24:10 ダビデは、民を数えて後、良心のとがめを感じた。そこで、ダビデは主に言った。「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。

私はほんとうに愚かなことをしました。」

ダビデは、とても繊細な人です。先ほど話しましたように、主によって与えられた良心に敏感な人です。私たちもそうですが、自分が罪を行なうまではその欲望を満たすために盲目になってしまいます。けれども行った後で、自分のしたことの愚かさを悟ります。

24:11 朝ダビデが起きると、次のような主のことばがダビデの先見者である預言者ガドにあった。
24:12 「行って、ダビデに告げよ。『主はこう仰せられる。わたしがあなたに負わせる三つのことがある。そのうち一つを選べ。わたしはあなたのためにそれをしよう。』」24:13 ガドはダビデのもとに行き、彼に告げて言った。「七年間のききんが、あなたの国に来るのがよいか。三か月間、あなたは仇の前を逃げ、仇があなたを追うのがよいか。三日間、あなたの国に疫病があるのがよいか。今、よく考えて、私を遣わされた方に、何と答えたらよいかを決めてください。」24:14 ダビデはガドに言った。「それは私には非常につらいことです。主の手に陥ることにしましょう。主のあわれみは深いからです。人の手には陥りたくありません。」

かつてウリヤを殺した時と同じように、イスラエルの王であるがゆえに、罪を犯した時の結果をお見せになります。懲らしめは、神の愛の表れです。それによって罪から離れるようにさせてくれるからです。

ダビデが選んだことは、彼の主に対する深い信頼が表れています。飢饉になれば、他国に食糧を依存しなければなりません。仇も、人間が絡みます。けれども疫病は主から直接与えられるもので、人間を介在しません。したがって、「主の手に陥ることにしましょう」と言いました。たとえそれが辛いことであっても、主は憐れみ深いから何とかしてくださる、という信仰が彼にはあったのです。私たちはそこまで、神の愛を知っているでしょうか？辛いこと、試練があるということ、それが主の愛の表れなのです。

24:15 すると、主は、その朝から、定められた時まで、イスラエルに疫病を下されたので、ダンからベエル・シェバに至るまで、民のうち七万人が死んだ。24:16 御使いが、エルサレムに手を伸べて、これを滅ぼそうとしたとき、主はわざわざを下すことを思い直し、民を滅ぼしている御使いに仰せられた。「もう十分だ。あなたの手を引け。」主の使いは、エブス人アラウナの打ち場のかたわらにいた。24:17 ダビデは、民を打っている御使いを見たとき、主に言った。「罪を犯したのは、この私です。私が悪いことをしたのです。この羊の群れがいったい何をしたのでしょうか。どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」24:18 その日、ガドはダビデのところに来て、彼に言った。「エブス人アラウナの打ち場に上って行って、主のために祭壇を築きなさい。」

主が御使いに、手を引けと命じられたのには理由があります。次のダビデの祈りがあったからです。そしてダビデは、自分がしてしまった愚かなことのために、自分ではなく他の人たちが害を受

けているのを見て、耐えられなくなりました。羊とイスラエルの民のことを呼んでいます。これが彼の心でした。自分が苦しむほうが、彼らが苦しみよりも良いとまで感じたほど苦しんだのです。

3B 償いのための敷地 19-25

24:19 そこでダビデは、ガドのことばのとおり、主が命じられたとおりに、上って行った。24:20 アラウナが見おろすと、王とその家来たちが自分のほうに進んで来るのが見えた。それで、アラウナは出て来て、地にひれ伏して、王に礼をした。24:21 アラウナは言った。「なぜ、王さまは、このしもべのところにおいでになるのですか。」そこでダビデは言った。「あなたの打ち場を買って、主のために祭壇を建てるためです。神罰が民に及ばないようにするためです。」24:22 アラウナはダビデに言った。「王さま。お気に召す物を取って、おさげください。ご覧ください。ここに全焼のいけにえのための牛がいます。たきぎにできる打穀機や牛の用具もあります。24:23 王さま。このアラウナはすべてを王に差し上げます。」アラウナはさらに王に言った。「あなたの神、主が、あなたのさげ物を受け入れてくださいますように。」24:24 しかし王はアラウナに言った。「いいえ、私はどうしても、代金を払って、あなたから買いたいのです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをさげたくありません。」そしてダビデは、打ち場と牛とを銀五十シケルで買った。24:25 こうしてダビデは、そこに主のために祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえとをさげた。主が、この国の祈りに心を動かされたので、神罰はイスラエルに及ばないようになった。

午前礼拝で紹介しましたように、ここがモリヤの山であり、アブラハムがかつてイサクを捧げようとしたところであり、そして、この場所が、ソロモンが神の宮を建てる神殿の丘となります。神殿が建つ場所が、ダビデが罪を犯したことによって、主があわれみを注いでくださった場所と同じであることはとても大事です。主の神殿は、私たち人間の正しさをいけにえとしてさげるところではなく、私たちの不足、過ち、罪を主に明らかにしていただき、赦しとあわれみを請うところなのです。それをソロモンは、神殿を奉獻する時の祈りの中心としていきます。

私たちは果たして、自分の正しさを証明しようとして生きているでしょうか？それとも、自分が主の前に出て、そのありのままの姿で神に自分自身を明け渡しているでしょうか？ダビデの生涯は徹頭徹尾、後者でありました。自分のありのままの姿を主に見ていただく人生でした。そして完成されるのが神の国です。ダビデの生涯にはいろいろな山がありましたが、それでも彼が主の前にきよくあろうとしている中で、神の働きが着実に進んでいきました。これがダビデから学ぶことができることです。

そして私たちも、キリストにあって王であり祭司となると約束されているのです。この地上にいる時であっても、自分の周りに神の国が広がっているでしょうか？自分が人々に対する祭司となり、また人々にキリストを認めさせる王としての務めは果たしているでしょうか。